

日本古を紡ぐ



普段づかいの風呂敷の「入門編」は、 日本古来の伝統文様をアレンジした商品

京都・四条堀川に代々受け継がれてきた家紋入りの正絹風呂敷のオーダー専門店がある。その三代目は2005年、既製の綿の風呂敷を発表し、これを機に社名・店名を「京都 掛札」に変えるという勇気ある決断をした。そして家紋をアレンジした木綿風呂敷専用のロゴマークをつくった。伝統文化を現代のライフスタイルにマッチさせるための、リデザインに挑戦している掛札英敬さんだ。世界の美意識が高い人々からの注目度も高い。

かけふだ・ひでたか

1977年、京都市生まれ。1996年、京都市立芸術大学入学。在学中に彫刻専攻から構想設計専攻に移籍。家業を手伝い始め、家紋帳を見て伝統文様に興味を抱き、大学卒業後に家業を継ぐ。2004年、中村勘九郎の「十八代目中村勘三郎襲名」の挨拶の品として木綿の風呂敷のデザイン、制作を担う。翌年、初めて既製の綿の風呂敷を発表。以降、伝統の文様をもとにした新作を発表している。



京都 掛札(かけふだ)

京都・四条堀川の交差点が少し入った小路にある店舗。店先に置いてある黄色い自転車のハンドルに、風呂敷包みが掛かっているのが目印。



<http://www.kakefuda.co.jp/>

◎「京都 掛札」三代目◎

掛札英敬さん

家業を継いでから普段づかいの風呂敷を考案

包む、結ぶ、ほどく、開く。平面から立体へ、立体から平面へ、荷物の大きさや形、包み方や結び方によって自在に姿を変える風呂敷。

奈良時代に正倉院蔵の宝物を包むのに使われた記録が残っていることから、日本には古くから「大切な物を布に包んで持ち運ぶ文化」が根づいていたことがわかる。

「京都 掛札」三代目の掛札英敬さんは、伝統的な吉祥文様(※1)を使った新しいデザインの木綿風呂敷を製作・販売している。

「これまでの風呂敷は、とことん和風の物がほとんどでした。着物の柄をそのまま切り取ったような模様も多いので、風呂敷はいまだに和装のイメージが強いです。でも、日常生活で洋服を着ていることのほうが多い今、着物にピッタリの風呂敷では出番が少ないし、結局タンスの肥やしになってしまう。

(※1) 吉祥文様:縁起がいいとされる動植物や物などを描いた絵柄。特に中国文化圏を中心にアジアで広く使われている。

洋服でも気軽に持てる。エコロジーのためやなくて、かわいらしいから持ってみる。使ってみたら便利やった。といった具合に、自然な流れで風呂敷に慣れ親しんでもらうには、まずは使いたくなるような見た目と使い方を提案せなあきません」

そう語る掛札さんだが、もともと家業を継ぐ気はなかったという。

「小さな頃から父が『継がなくてもいい』と言っていたんです。でも、大学在学中に少し仕事を手伝うようになり、その頃に家紋のデザインを見て『なんて洗練されてるんやろう』と思い、興味を抱いたんです」

中村勘九郎(現勘三郎)さんの「十八代中村勘三郎 襲名」の内祝の綿の風呂敷をつくるのが転機となった。

『「こんなんでしょう?』』と言って提案してもらった風呂敷のデザインを気に入ってもらえたんです。そのデザインで作らせてもらった風呂敷がたまたま木綿で、できあがったサンプルの風呂敷を自分で使ってみて、これは便利やなあと感じたんです」

風呂敷の「入門編」になる商品が必要だと感じた機会として、こんなエピソードもある。

「たまに若い男の子が店に入ってきて『風呂敷を使ってみたい』と言ってくれたことがありました。若い人にいきなり『絹の風呂敷をオーダーメイドしなさい』というのも無茶な話です。『試しに使ってみよか』という入口として、オーダーメイドは金額的にも向いてませんし、絹の風呂敷は汚したら大変ですけど、自分で洗濯できる綿なら気軽に使えるでしょ? まずは入門編として気軽に使ってもらえる綿の風呂敷がほしいと思ったんです」



青海波(ピンク)を使ったブチバッグ

家紋や伝統文様にはセンスと意味がある

掛札さんは試行錯誤した。

「風呂敷はあくまで一枚の正方形の布、そこをいじるとかえって不便利な道具になります。アレンジするのはやはり生地に載せる柄、今まで使っていなかった人もつい風呂敷を使ってみたいくなるような文様にしたい、と思いました。が、今までにないようなものを作ろうと思うと、当然お手本がないので困りました。そこでふと浮かんだのが日本の伝統文様。

風呂敷を必ずしも『和物』と捉える必要はないとは思いつつ、やはり誇るべき日本文化のひとつやし、風呂敷の入口になると同時に、日本の文様の魅力に少し触れてもらえるきっかけになったらええなあ、とも考えまして」

そして家業が扱ってきた家紋についてもこう語る。

「家紋っていうのは、今で言うロゴマークみたいなもんです。家紋はすべて、まったくの白と黒で描けるデザインになってますし、けっこう必要最低の形や線でいろんな草花を描き分けている。まずそれがすごい。全体として丸い形になっているとか割り付けがどうか、ある程度のルールにのっとっているくせに、いきなりとんでもないアレンジがあったり、バリエーションの発展のさせ方なんかはかなりおもしろいんです。

家紋帳なんて、一日眺めていても飽きませんよ。ほんまに昔の日本のデザインはすごいなと思いました。そうやって調べていくうちに、家紋や文様のモチーフには日本独特の意味合いがあることを知ったんです」

伝統文様の意味は深い。「京都 掛札」の木綿風呂敷には、現在7文様、色違いを含めて12種類がある。

風呂敷の包み方・結び方の一例



書類ケースやノートパソコン、パネルなど平たい長方形のものを手提げで持てるように包む「ノート包み」。



一升瓶など瓶状のものを包むときに使う「びん包み」の正面(左)と裏(右)。



木綿風呂敷は一枚ずつ、この紙のパッケージに入れて手渡される。大きさは31.5cm角の正方形。LPレコードのジャケットサイズだ。

木綿風呂敷の使い方 — ドロップバッグ、ブチバッグ編 —

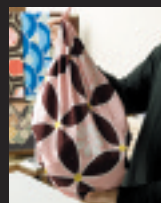
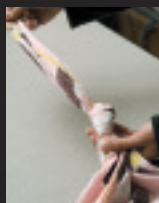
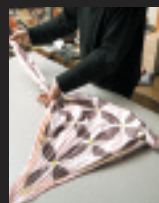
◆ドロップバッグ◆

風呂敷の裏が外側になるように、中表で三角に半分を折って、左右の角をそれぞれひとつ結びます。

結び目から先までの長さが、20cmちよつとぐらいになるよう、左右の結び目を同じぐらいに揃える。

袋状になった風呂敷を、表の面が外に出るよう裏返して、左右の結び目を袋の中に入れ込む。

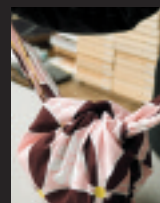
残った二つの角を上て真結びすれば、「ドロップバッグ」が完成。手提げはもちろん、肩掛けにもできる。



◆ドロップバッグをアレンジしたブチバッグ◆

ドロップバッグの最後の真結びのかわりに、残った二つの角を一度からめる。

いったん下までキュッと絞る。



「日本人は昔から縁起を担ぐのが好きなせいか、伝統の文様はほとんど何かしらの『縁起の良い』意味や解釈を含んでいるんですね。こういう『ゲン担ぎ癖』も日本の文化のひとつでしょう」

そして風呂敷を使ってもらう理由にふれる。

「エコロジーの面から風呂敷が話題になるのは良いことだと思うんですが、『環境にいいから使いましょう』というのは、あんまり『使いたい』という理由にはならへんと思うんですね。それよりも『こんなにかわいい風呂敷があるんや!』と感じてもらい、使ってみたいと思ってもらえるのがええな、と思ってます」

変わらないためには、常に変わり続けること

「京都 掛札」の木綿風呂敷を買うと、イラストで解説された包み方・結び方のしおりがついている。これも掛札さんのアイデアだ。

「ほとんどの包み方は昔からあるものですが、中には自分で使ううちに『ここをこうしたらもっとカワイくなるな』と思いついて、僕がアレンジした結び方もあります。お客さんに『こんな使い方してますよ』と教えてもらうこともありますし。

風呂敷の包み方には、こうでないとダメという決まりがないのがおもしろいんです。でも、はじめの一步を手引きする意味で、結び方や使い方の例を紹介してるだけです」

掛札さんは綿の風呂敷と同時に、それ専用の新しいロゴマークも作った。これもまた長い間使っている家紋の「抱松葉に小植」をもとにしている。三代目は家業に変革をもたらしたようだ。

綿の風呂敷をつくろうとしたとき、掛札さんの父、二代目からは特に何も言われなかったという。

「綿の風呂敷に関しては、最初から僕が考えてやってるものですから、こうやって取材にお応えするのも僕です」

そう語る息子の姿を父親は黙って見ている。三代目は少し未来を見ている。

「外国の人のほうが日本文化をよく知っているケースもあるくらいですし、若い人たちにもっと日本文化のすごいところや、伝統文様のかわいさを知って欲しいです。もともとがグラフィックデザイン好きなので、ひょっとしたら風呂敷以外のモノも考えるかもしれません。僕の描いた日本の文様が活きるものであれば、それが和の道具じゃなくてもいいですけど(笑)」

さまざまな水の表情をかたどった流水文様「観世水」。ある日、店にふらっと訪れたローリング・ストーンズのミック・ジャガーが、その文様の風呂敷をためらわずに買い求めたという。

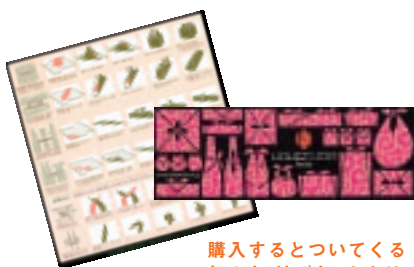
掛札さんは「そのときは片言の英会話に必死で、思いつかへんかったんですけど、あとになってみれば、この文様に『流れる水は腐らぬ』＝『転がる石は苔むさず』という意味があること説明したかった」と笑う。

掛札さんは、この文様をホームページで次のように解説している。「『伝統』という言葉でさえ、おそらくそれぞれの時代に合わせて少しずつ変わってきたからこそ、今なお『伝統』として現代にまで伝わっているのでしょう。ずっと変わらずにあり続けるためには、常に変わり続けるということ」

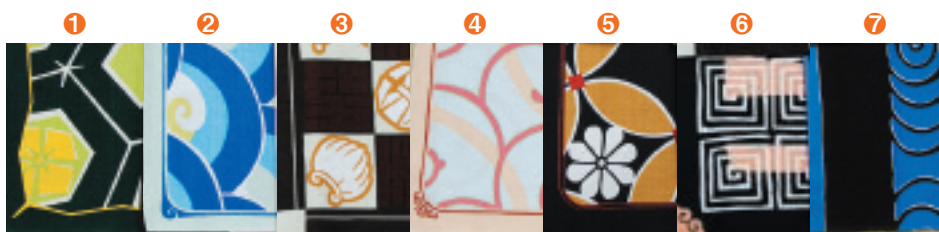
老舗の「京都 掛札」三代目は伝統を重んじながら、それを現代風にアレンジし、現代という川の流れに合流させようとしているようだ。

Text by : 綾瀬良太

掛札さんがデザインした木綿風呂敷の文様と意味



購入するとついてくる
包み方・結び方のしおり



① 亀甲

六角形の並ぶ幾何学模様を亀の甲羅の模様に見立てたもの。長寿のシンボル亀は、吉祥文様の代表。

② 青海波

波のうねりを表す半円が重なって続いていく模様。恒常的な平和への願いがこめられている。

③ 宝尽し

宝珠や宝巻(ほうかん)など縁起のよい宝物で埋め尽くされ、福德招来の願いが込められている。

④ 唐草

どんどん生長し、どこまでも伸びる蔓の姿から、唐草には不断長久、長寿の願いがこめられている。

⑤ 七宝

円が四方に重なり合って、つながっていく七宝はさまざまな「円満」を表している。

⑥ 雷格子

農耕民族にとって恵みの雨を連れてくる雷はありがたいもの。五穀豊穡、豊年満作への祈りを表す。

⑦ 観世水(かんぜみず)

水の流れや水面が渦を巻いた姿を段違いに描いたもの。止まることのない未来永劫を表す。

◆「京都 掛札」の木綿風呂敷は、今月号のプレゼント賞品です。詳しくは39ページをご覧ください。

絞った上に輪をつくるようにして真結びすれば取手ができる。

絞った部分を締めたり緩めたりして、中の物を出し入れできる。

